

# 「CEFR」「スペイン語学習のめやす」とスペイン語教育実践

大森洋子

## 要旨

本稿では、「CEFR」、およびスペイン語教育研究会作成の「スペイン語学習のめやす」を外観しながら、これらを授業の中に取り入れて授業実践を行ったら良いかについて、日頃の実践報告を行うものである。特に、「CEFR」に言及する際、特に6段階に分かれたCan-do指標に関心が集まり、「CEFR」目的としている社会的存在としての学習者、また複言語、複言語能力の養成、および自律的学習者の養成という観点から、日頃授業で実践している事柄を提示することを目的としている。第1に、実際に限られた時間、決められたシラバスの中でどのように言語活動の実践を行うことができるのかについて、第2に社会的存在としての学習者について、初級文法の中で行えるコミュニケーション活動の大切さについての日頃の実践例の紹介、さらに授業から課外へとつなげることにより、さらに自律的学習へ繋ぐことができるのではないかとすることを提案している。昨今のコロナ禍の状況の中で遠隔授業が余儀なくされる中、学習者のモチベーションをどのように高めることができるのか、教員1人の活動がどのように今後連携されていけば良いのかについて考察を試みたものである。

**キーワード：**CEFR, スペイン語学習のめやす, グラフィックシラバス, 複言語能力, ポートフォリオ, ルーブリック評価

## 0. はじめに

外国語教育に携わる際に、CEFR（外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ参照枠）は、いろいろなところで話題になっている。スペイン語についても1980年代後半からのスペイン語教育のセミナー等に参加する中で、その前身にあたるThe threshold level for language learning in schools（1976）などに基づくアクティビティの例など、新しい視点を持つ教科書の例などに接する機会があった。その後、また2003年に発足させたスペイン語教育研究会の活動の中で、CEFRの一部を読むなどの機会、またそれに基づいたスペインセルバンテス文化センターによるPlan Curricular del Instituto Cervantesに触れる中で、特に能力指標検討するに当たり、このような共通な指標があることにより、高校から大学へつながり、その他学習の継続を考えるとこのような指標は有効であるのではないかと、しかしながら、日本におけるスペイン語教育（大学の第2外国語）の中で、A1がかなり目標としては高いかもしれない、独自の指標があってもいいかもしれない。その結果、スペイン語学習のめやす、策定を計画することとなった。特にその中では、国際文化フォーラム作成の「外国語学習のめやす—高等学校の中国語と韓国語教育の提言」も大いに参考にし、スペイン語学習のめやすを策定し、引き続いてそれらのめやすに基づく具体的なアクティビティの提案に至っている<sup>1</sup>。

本稿では、CEFRとの関連ということ意識して、3つの観点から授業実践ではどんなことができているか、また課題について扱う。この中では特に授業ではどう活かしたらいいのかというのが問題、第2に、行動主義、社会的存在としての学習者、という観点から、第3に自律学習姿勢、また複言語主義という観点からどんな実践を行うことが可能かを自分自身の授業実践に基づいて紹介する。

1 12のテーマ（自分、家族について話す、日常生活、家族、都市と交通、日本とスペイン語圏の国々など）を設定し、それにそれぞれの到達目標（レベル表示）及び社会文化、語用論的な点に考慮入れながら、具体的な機能、語彙、文法をモデル文とともに示す。なお、現在は、それらのアクティビティについて評価基準について検討を行なっているところである。

## 1. CEFR, スペイン語学習のめやす—授業との連携

それぞれのテーマについて提示しているアクティビティは、より実生活と繋がったことをテーマにしている。ここで問題として指摘したいのは、教科書、進度が決められている中でどのように利用したら良いのか、共通シラバスの中で生かせる方法はあるのか、といった疑問です。さらに、文法事項の把握が必要な授業ではどのような利用が可能なのかということが問題になる。

さらに、共通シラバスでこの授業の内容が決められているときにどうするのか、どの程度このような活動を入れることが可能なのかということも問題も生じる。

そこで、実際には、授業最初に授業で行う活動も含めて「グラフィックシラバス」を提示し、何をどこまで学習するとどんな活動ができるかを示す形で実践できるだろう。グラフィックシラバスとは、それぞれの回がどのように結びついているのかを図で表しながらコースの流れを示すシラバスと言える<sup>2</sup>。この方法を用いることで、学習内容が何を目標に向かって構成されているかを示すことができ、いくつかの文法項目を使いながら具体的なテーマでの表現活動を行うことができる。学生は、単にそれぞれの回に学習した文法事項がより身近なテーマについて表現できることで学習成果に気づくことができたとと言えるだろう。

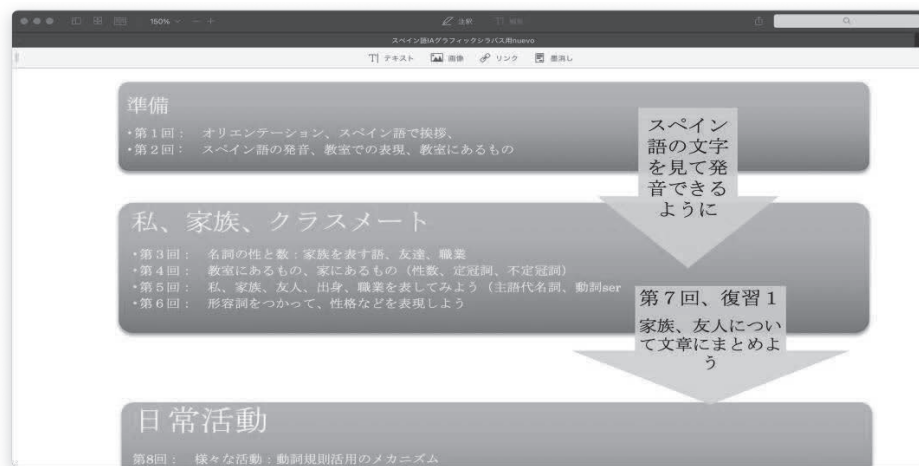


図1：学生に示すグラフィックシラバスの一部

図1では、第6回までを行うと、家族、友人について紹介する文章をまとめることができること、課題になることを示している。このような形で、年間に4回程度の表現活動を行なっている。いくつかの回ごとに表現活動を入れることにより、文法の説明時に表現活動に必要な語彙の積極的な導入などの工夫が可能となる。また、学生は、それぞれ何を目標に学習するのかを意識するようになるなどが観察される。

## 2. 行動主義：社会的存在としての学習者

CEFRの特徴の一つとして、行動主義、社会的存在としての学習者ということ意識している点を挙げるができる。外国語の授業は、さまざまなコミュニケーションの場と考えると、教室そのものが一つのコミュニティと考えることができ、ペア、グループ活動を積極的に取り入れることが大切であると考え。簡単な文法問題でも教員の文法の説明などの理解をお互いに確認しながら問題を行うことで、自分の理解を確かめたり、分からないことを教え合ったりする場を提供することが可能である。ペアでの簡単なコミュニケーション活動については、最後に活動内容から得た結果をさらに大きなグループで報告しあう時間を持つこ

2 cf. 栗田佳代子、日本教育研究イノベーションセンター編著『インタラクティブ・ティーチング—アクティブ・ラーニングを促す授業づくり』(2017) 第5章参照

とで、作業がうまくいったかを学生同士で確認することもメリットの一つと考える。このような中で、さまざまな活動の中で協働作業の意識を高め合っているとと言えるだろう。

なぜ、文法の中でのコミュニケーション活動の必要性については、「CEFR」において文法知識ではなく、文法能力の育成ということを分けて説明している点に注目したい。文法知識を一つの塊として考えるのではなく、常に、学んでいる文法がどこでどのように生かせるのかを考える必要があるのではないだろうか、そして学習者自身—学生が、文法を学びながら常に実際のシチュエーションを意識させることが、文法能力の育成にもつながると考えている。

文法を教える際に、単に形態論的情報、統語論、意味論的情報だけでなく、どんな状況で使われているのか、一つ一つの文が適切に解釈されるためにはどんな能力が必要なのかということ意識させることも大切である。文法を説明するための一つの単純な文でもどんな状況で使われるだろう、と考えるのは意味があるだろう。文法授業で使う例文では、特にその点を意識して学生に問いかけを行なっている。

実際のコミュニケーションを意識させるために、例えば、ビデオ等を使って提示することもあり、その中では、どんな状況で使われている会話を意識させるだけでなく、ターゲットとなる表現だけでなく、実際の状況や文化的な側面、日本との違いなどに目を向けることにつながっていくと考えている<sup>3</sup>。

### 3. 複言語主義、自律学習姿勢

CEFR では、特に1人の言語話者が特定の言語だけでなく、さまざまな言語能力を身につけることで、よりその言語能力が豊かになるという複言語主義を強調している。ヨーロッパの中でさまざまな言語について自分の生活の中で必要とする言語を、自分の用途に基づいてその能力を伸ばしていくことが大切であるとす。第1節であげた言語能力指標もその概念に基づいて、自分が必要な能力をどのように伸ばしていく必要があるかを示したものとも言える。これが、自律学習姿勢にもつながり、どんな人もいくつかの言語の話者であると同時に言語の学習者でもある、既知の言語の知識がさまざまな言語活動を豊かにし、更なる言語習得に役立つだろうと思われる。それが、生涯にわたって学んでいく必要があるということにつながるだろう。

大学で外国語を学習するときには、複言語ということ意識する大切な機会であると言えよう。英語を学習しているのであれば、新しく学習する言語との違いを意識し、それまでは、日本語としか比較しないような状況の中で、他の言語構造についても意識する機会に恵まれるだろう、また新しい言語を学ぶ環境では、英語とは異なる言語知識、表現形式の違いを意識し、日本語の特徴への気づきにつながるだろう。英語にはない文法規則などを説明する際に、日本語や英語と比較して説明することを意識することで、新たな言語の特徴にも気づくことになる。それが、さまざまな言語を学習するためのコツ、学習ストラテジーを意識することになる。文法の授業でも単に文法規則、用例を示すだけでなく、他言語との比較、また表現形式の違いを考えさせる方法を導入することで、文法はむずかしい、暗記しなくてはならないのでつまらないなど日頃のマイナスのイメージを払拭し、言語を学ぶ楽しさを伝えることにもつながるのではないだろうか。このような方法は、学生同士の意見交換の機会をより多く与えることになり、文法からコミュニケーションへの橋渡しにもなっていくだろう。さらに、英語に限らず日本語、個人個人が身近に接する言語への興味、注意喚起にもなり、学生の自主的な気づき、自律的な学習につながっていくと考える。

自律的な学習姿勢の涵養は、限られた時間数の中で展開される大学における外国語教育の中では重要な意味を持っていると思われる。大半の場合に必修という枠の中で学習している状況では、学生が自ら興味を持ち、自発的に学習していく方向に向かわせることが大きな目標となっている。このためには、常に、なぜ、何のために、何を目標に学習しているかを意識させることが大切であろう。最初は色々なきっかけで学習する言語でも、色々授業活動の中から自ら目標を見つけて、さまざまな課外学や社会活動に積極的参加する学生を養成することが外国語教師の一つの大きな役割だと言えよう。

3 ビデオを使う際には、授業前に何度も視聴できるような課題を設定し、視聴のポイントを設問の形で提示しておく。このようにすることで、授業での課題達成が用意になるように工夫し、学生の達成感に留意するように工夫している。

一つの試みとしては、「ポートフォリオ作成」を挙げることができる。明治学院大学教養教育センターでは、「MGU 外国語学習ポートフォリオ」を2014年に作成し、学生へ配布を試みたが、まずその実践の意味を学生があまり理解できなかったこと、さらに授業の中でそれを振り返ったり、何ができるようになったかをお互いに確認したりすることができなかったために定着には至らなかった。まずは、教室内での指導実践が大切であるということを実感した。

授業内では、まず自分が何を学習しているのか、何ができるようになったか、また何を復習する必要があるかという自分の学習の振り返りをさせることが大切などはないかと考えている。そのための実践として、授業の最初に、毎回の授業の目的、到達目標を確認すること、授業後に振り返りの記入し、それに対してのコメント記入、次の時授業での再説明などを実践している。全体的に見れば、簡単なコメントで終わる学習者も多い中、様々な気づき、前から気になっていた語がスペイン語だったんだという気づきのコメント、こんな語を聞いたことがあるが、これもスペイン語と関係あるといった新たな質問、など一自分の言語知識の構築に役立っているだろうと思えるコメントがあり、少しずつでも意味があるだろうと思っている。

最後に、さまざまな活動、課題を通じて、学生が到達目標を達成できたか、を把握すること、次に努力したいことを自分から考えることにつながるからである。大学の外国語授業の目的の一つに、自律学習姿勢の涵養を入れるとしたら、学びにつながる評価を念頭に、いくつかの課題で、ルーブリック評価を取り入れている。試験だけの評価だけでなく、実際に行った授業活動、振り返りシートなども参考することも必要だろう。

さらに、いくつかの課題では、ルーブリック評価を利用し、時間が許せば、添削、コメント後に再提出させることで、成果だけでなくプロセスも重要であることの気づきを促すことが大切と言える。ルーブリック評価では、内容、構成、文法、語彙、独創性、文章構成などを評価の観点とし、一つ一つについて3つの尺度（例えば：内容、目標以上：学習した項目と文法、語彙を踏まえ、要求された内容を過不足なく盛り込んでいる 構成、目標以上：要求された内容を、整理して提示し、文章としてまとまりがある、）を示し、さらに全体的なコメントをつけて、評価できる点、また改善の余地のある点として示して返却する。何をどのように評価するのかに学生自身が慣れていかないと、なかなか自己評価、作成の段階において評価を利用するという習慣がつかないと言える。課題、その目標、さらにどんな点を重視するかを十分に説明することで、課題への取り組み意欲が向上するようである。

#### 4. 終わりに

コロナ禍のなかで、対面授業からオンライン（同時双方向）への切り替えを余儀なくされ対面での学習を補うための色々なツールの使用など工夫がなされ、その仕様についても検討してきたが、実際にオンラインになることによってそれらのツールが役に立ったとも言える。LMSも単にファイルの受け渡し、簡単な復習チェックの問題などに特化して利用していたところから、音声ファイルの提出、発音確認など、授業外での学習を促すための色々な工夫ができることもわかった。学生の学習状況がLMSで集約されるために、自習学習がどれだけ進められているかもわかり、その都度コメントすることで自習（自律学習）の大切さも少しは伝わったのではないかと考えている。

この機会には、個人的な実践の話が中心で、これらの体験を教師同士が共有することで、より改善された効果的な方法を模索できるのではないかと考えられる。まずは、一つの言語の中で、情報交換することによって、それぞれの教師の個性を生かしながら、同じ目標に向かっての教育ができると考えている。さらに、様々な言語間の授業実践報告を通して、今までにはない新しい視点をそれぞれの言語の教育にも生かせるだろう。それぞれの言語に特徴的なことを自分が教える言語に当てはめるとどのように利用できるかを考えることで、更なる言語教育の発展が望めると期待している。

#### 参考文献

- Nilson B, Linda (2007). *The Graphic Syllabus and Outcomes Map: Communicating Your Course* Jossey-Bass.  
 吉島 茂、大橋理恵 訳編 (2014) 『外国語教育 II, 外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照

粋』朝日出版社

栗田佳代子 編著 (2017) 『インタラクティブ・ティーチング』 河合出版

国際文化フォーラム編. (2012) 『外国語学習のめやす 2012 高等学校の中国語と韓国語教育からの提言』

[https://www.tjf.or.jp/wp-content/uploads/2019/08/02meyasu2012\\_final.pdf](https://www.tjf.or.jp/wp-content/uploads/2019/08/02meyasu2012_final.pdf)

(スペイン語参考文献)

Amenós Pons, J., Ahern, A. y Escandell Vidal, María V. (2019)

*Comunicación y cognición en ELE: la perspectiva pragmática*. Edinumen.

Centellas Rodrigo, Aurora, et.al. (2021). *Español como lengua extranjera, Niveles de la lengua y actividades comunicativas*. Enclave.

——— (2021). *Lingüística aplicada Adquisición del español como lengua extranjera*. Enclave.

(参考文献：その他)

スペイン語の学習のめやす <http://gide.curhost.com/publicacionesJP.html>

GIDE (スペイン語教育研究会編) (2015) *Un modelo de contenidos para un modelo de actuación Enseñar español como segunda lengua extranjera en Japón*. 『言語運用を重視した参照基準「スペイン語の学習のめやす」日本における第二外国語としてのスペイン語教育』

GIDE (スペイン語教育研究会編) (2019). *Un modelo de actuación. Aplicaciones prácticas para la clase de español*. 『スペイン語学習のめやす：教室活動への応用』